

鳴井山

月次の加茂神社の境内から湧き出る水は、干ばつにも枯れることなく、大雨でもにじることなく、いつも一定量の水が鳴りながら湧き出ています。そんなことから、加茂神社は「鳴井山」と呼ばれるようになったそうです。

鳴井山は雨乞いの信仰とともに雷神信仰が有名です。これについて、興味ある言い伝えが残っています。

むかし、あつたと。

雷神信仰で参拝する人々が多かったこの神社を、ひとりの武士が訪れたんだと。人々が厚く信仰している姿を見て、霊験が本当かどうか、試してみようとしたんだと。

武士は多くの参拝者の前で、

「もし本当に霊験あらたかならば、われに神罰を下してみよ」と言うが早いのか、拝殿の柱に刀で切りつけたんだと。

しばらくしても何の変化もないので、その武士はあざ笑い、

「霊験なんかない」

と言って神社を立ち去ろうと石段を降りたんだと。そしたら、にわかには雷鳴がとどろき、大鳥居を過ぎてまもなく、武士に雷が落ち、死んでしまったそうだと。

参拝の人々は、霊験のあらたかさに驚き、益々信仰をするようになったんだと。

今でも、毎年五月の中旬には、お祀りがあり、多くの梵天があがります。

梵天は、長さ十メートル以上もある青竹を、根ごと掘り起こし、縄を結び付けて作られたもので、梵天の竹先を空高くあげながら運びます。これは、神社に運ばれる間に、悩みや悪い考えなどを払いおとすために行うもので、奉納される時には持ち手全員が純粋な気持ちになると言われています。

この梵天奉納は、かつては、近郷近在からたくさんの人々がお参りに来ていましたが、時代の流れとともに梵天の数も少なくなり、お祀りにもさみしさが感じられます。

それでも、その日は晴れていても、お祀りが始まるころには雨になることが多く、霊験あらたかな神社として信仰があります。

おしまい